



日本交流分析学会 第38回学術大会

共同開催

2013 ITAA 国際大会 in OSAKA

会期 2013年 8月15日(木)～17日(土)

会場 大阪国際会議場 (大阪市北区中之島)

大会長 島田 凉子 人間総合科学大学

テーマ

光と影
采と影

—その心理的統合—

助成



独立行政法人

日本万国博覧会記念機構



© 大阪観光局 ((公財)大阪観光コンベンション協会)

日本交流分析学会

第38回学術大会

共同開催

2013 ITAA 国際大会 in OSAKA

|||| ■■■■■ プログラム・抄録集 ■■■■■ |||||

大会テーマ

光と影

— その心理的統合 —

会期

2013年
8月15日(木) ~ 17日(土)

会場

大阪国際会議場
(大阪市北区中之島)

大会長

島田 涼子
人間総合科学大学

日本交流分析学会第38回学術大会大会長のご挨拶

日本交流分析学会第38回学術大会

大会長 島田 涼子

日本交流分析学会第38回学術大会が、日本で初めて開催される ITAA 国際大会と共催されます！国際大会主催者委員会、日本交流分析学会事務局、学術大会組織委員会・事務局をはじめ実現のため共に力を合わせてくださっている方々に心より感謝申し上げます。

ITAA 国際大会を日本で開くことは、5月に亡くなられた深澤道子先生の長年の夢でもありました。深澤先生は米国で主に M.James や Goulding 夫妻から TA を学ばれ、帰国後の30年を超える教育と治療の実践を通して、TA とくに再決断療法を日本に紹介し、浸透させてこられました。先生の TA101 参加者は2,000人を超え、先生の指導の下で多くの ITAA 有資格者が育ち、また、ご著書、訳書は数えきれません。深澤先生は早稲田大学の名誉教授であり、ITAA 教授会員、日本 TA 協会の前会長、そして、日本交流分析学会の理事でもいらっしゃいました。今回の国際大会&学術大会への参加登録数が過去の ITAA 国際大会参加者数と比較しても驚くほどの多数に達したことは、深澤先生や、日本における心療内科の基礎を築き TA の位置づけを確立された故池見酉次郎先生ら多くの偉大な先生方のご努力が、長い時間を経て熟成した結果であり、また、今後のさらなる発展にとっての堅固な土台となるものと考えられます。

国際大会のテーマには震災後の私たち日本人の祈りが込められています。そこで、学術大会テーマは「光と影～その心理的統合」としました。震災とそれに続いて引き起こされた原発事故によって、私たちは、文明の影の恐ろしさに直面し、また、生と死がいつも隣り合わせであることをあらためて思い知らされました。影の脅威は、抑圧や否認によって高まります。「喪の作業」についての研究や「死の準備教育」もこうした考えから生まれたと思います。心理療法力論そのものについても同様で、私達は顕著な有効性ばかりを強調するのでなくその影も見据える必要があるでしょう。TA の魅力は、クライアントの主体的取り組みとパワーを重視し、「早く治す」点にあります。ところが境界性パーソナリティや自己に障害を持つクライアントの治療では、短時間で明瞭な効果を得られず、私たちセラピストもクライアントとともに方向性を見失って苦しむことも多いのです。しかし長い間 TA のそうした部分には光を当てられることがありませんでした。その TA の影の領域においてセラピストができることを理論化したのが関係性 TA でした。本学術大会では、TA の影、心理療法の影、セラピスト自身の影に目を向け、議論の俎上に載せたいと思いました。その延長線上で、シンポジウムのテーマは「傷ついた治療者」としました。定藤規弘先生の「早期対人関係の取り込みを脳科学の視点から考える」では自己の形成過程について、北山修先生の「私たちの表と裏～精神分析の視点」では、心の多層性についての理解を深めることができるでしょう。この大会が参加者のさまざまな統合のプロセスのコンテナとなることを願っています。

2013 ITAA 国際大会大会長挨拶

2013 ITAA 国際大会 in OSAKA

大会長 杉田 峰康

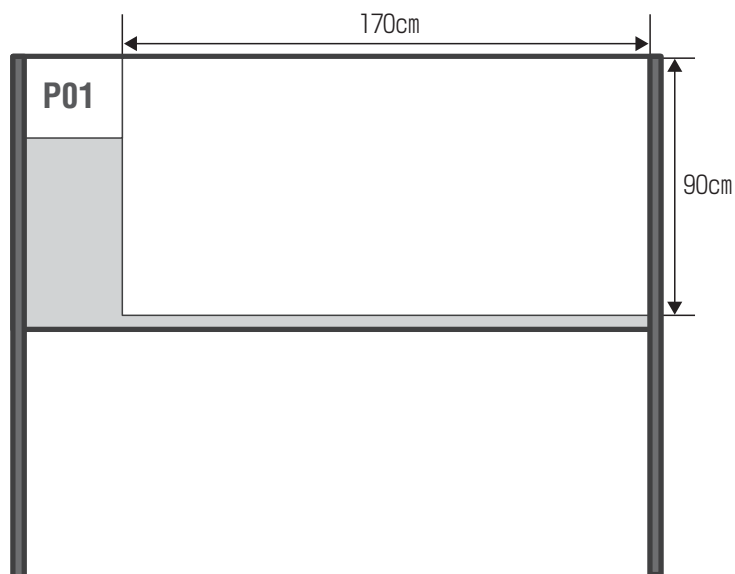
この度、2013年 ITAA 国際大会がわが国の大阪で開催されるに至ったことに
熱い感激を憶えております。今回の国際大会のテーマは Recovery, Rebirth,
New Beginning : 「回復・再生・新スタート」です。未だに記憶に新しい2011年
3月、日本は東北地方で地震、津波、放射能という3重の災害に見舞われまし
た。今、被災地では多くの暖かい支援の下、深い傷つきから立ち上がり、新た
な生活に向けてさまざまな取り組みが始まっております。

これと共に私たちの精神生活も、この3つを繰り返すプロセスといえましょ
う。この意味も含めて本大会のテーマとして回復、復活、新たな出発を内容と
する3つの言葉が選ばれました。

東アジアの中でも伝統文化と科学技術が混在するといわれる日本で、TA の
諸派が参加して開催されるという意味では、わが国で最初の TA の本格的な
国際会議となります。遠くからお越しいただく外国の皆さまを心より歓迎いた
します。また、8月のお盆という国民的行事の最中に、本大会を選択されてご
参加くださった日本の皆さまに厚くお礼申し上げます。諸外国よりお出での
方々は、この機会に日本の TA 仲間たちとの交流を楽しんでください。日本
の TA 実践者、研究者、学習者、愛好家の皆さま、日本人同士の交流は勿論
のこと、言葉の壁を乗り越えて、バーンの言う“火星人”になって、できるだ
け多くの外国の TA 人と出合ってください。皆さまの時間が親密なストロー
ク交換と新たな気づきで満たされることを願っております。

ポスター発表者へのご案内

- 会場は大阪国際会議場10階1004-1005会議室です。8月15日(木)午前10時から13時の間に所定の場所に貼り付けてください。
- ポスターの貼り付けスペースは横170センチ×縦90センチです。
通常と異なり、**横長**となりますのでご注意ください。
左上に演題番号を付けてありますので、そのパネルに貼付してください。
ピンはこちらで用意いたします。



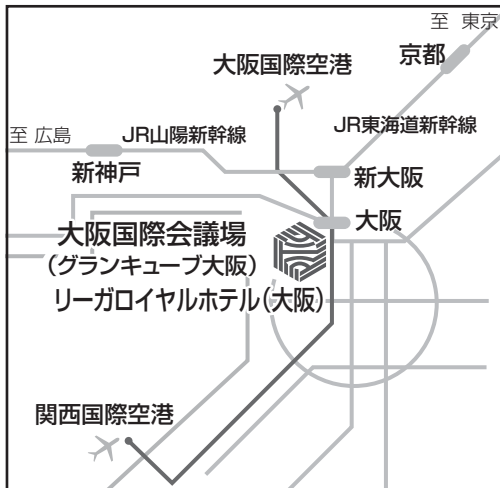
- 発表は8月15日(木)午後1時30分スタートです。
同じ会場内でA・Bグループに分かれての同時進行です。
- 発表時間8分、質疑応答4分といたします。
発表開始後7分経過時に1鈴、8分経過時に2鈴、11分経過時に1鈴、12分経過時に2鈴を鳴らします。
- ポスターの撤去は8月15日(木)16時30分までにお願いいたします。それ以降ポスターが残っていた場合、大会事務局で処分させていただきます。

会場のご案内

大阪国際会議場
(グランキューブ大阪)

〒530-0005 大阪市北区中之島5丁目3番51号
TEL:06-4803-5555(代表) FAX:06-4803-5620

■ 空港・新幹線より



■ 関西国際空港からJR大阪駅まで

- JR関空特急(はるか)でJR「大阪駅」まで約55分
- 空港リムジンバスでJR「大阪駅」まで約60分

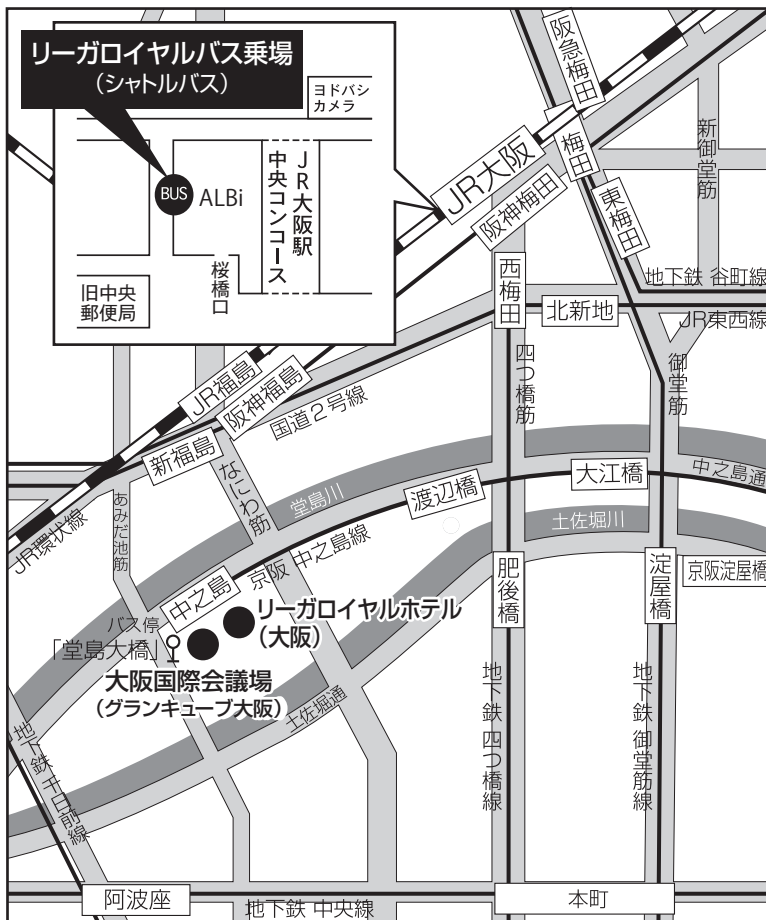
■ 大阪空港(伊丹)からJR大阪駅・淀屋橋駅まで

- 空港リムジンバスでJR「大阪駅」まで約30分
- 大阪モノレールより「千里中央駅」にて大阪市営地下鉄御堂筋線に乗り換え、「淀屋橋」駅まで約45分

■ 新幹線(新大阪駅)から淀屋橋駅まで

- 地下鉄御堂筋線「新大阪駅」より「淀屋橋駅」まで約10分

■ 周辺アクセス



■ 大阪国際会議場・リーガロイヤルホテル(大阪)周辺アクセス

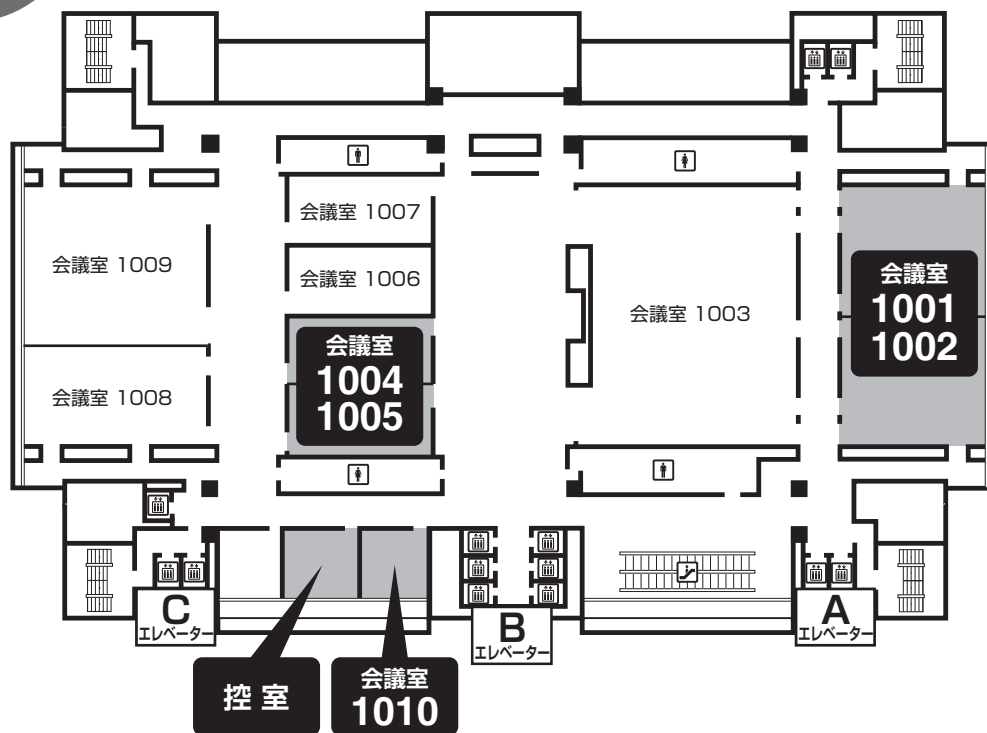
- JR「大阪駅」・阪急「梅田駅」より、地下鉄御堂筋線で「淀屋橋駅」下車後、京阪電車中之島線「大江橋駅」にて乗り換え、京阪電車中之島線「中之島駅」から徒歩 約1分
- JR「大阪駅」駅前バスターミナルから、大阪市バス【53系統 船津橋行】または【堪55系統 鶴町四行】で約15分「堂島大橋」バス停下車すぐ
- JR大阪環状線「福島駅」から徒歩 約10分
- JR東西線「新福島駅」【2番出口】から徒歩約10分
- 阪神電鉄「福島駅」から徒歩 約10分
- 無料シャトルバスが、「リーガロイヤルホテル」とJR「大阪駅」桜橋口の間で運行しており、ご利用いただけます。混み合うことも予想されますので、予めご了承ください。

大阪駅→リーガロイヤルホテル大阪
シャトルバス 運行時刻表

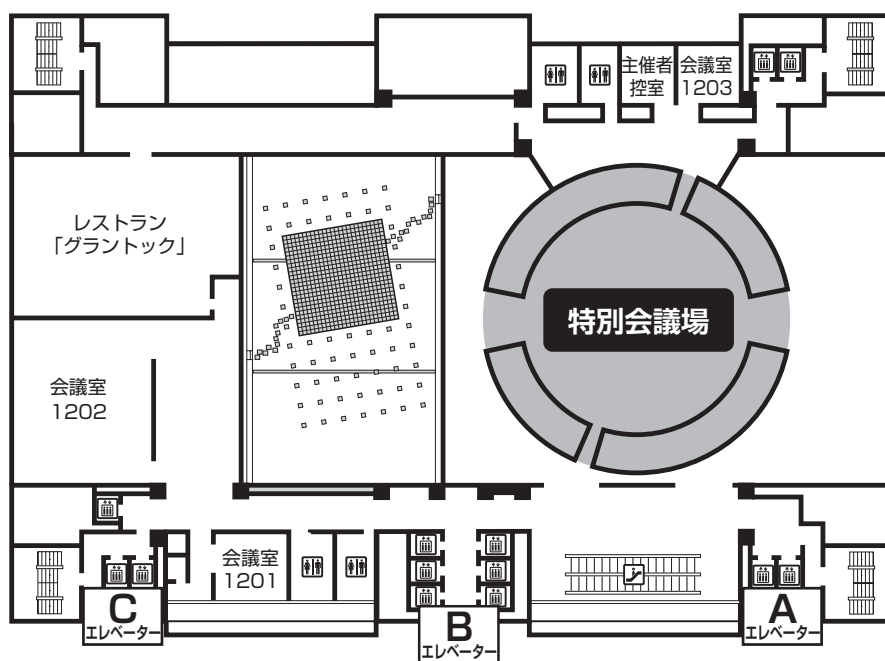
7:45~10:00	15分間隔
10:00~21:00	6分間隔
21:00~22:15	15分間隔

会場案内

10F



12F



大会日程

※印は国際大会との共同企画

8月15日(木)

8月16日(金)

8月17日(土)

8:30	8:30～ 受付開始		
9:00	9:00～ 開 場		
	9:15～ 開 会 式※ 12F 特別会議場		
10:00	10:00～11:45 12F 特別会議場 基調講演1※ 新たなる出発、新たな物語 —世界の語り直しと 未来の再構築— トゥルディ ニュートン ▶P18へ	9:45～12:00 10F 1004-1005 大会シンポジウム 傷ついた治療者 シンポジスト：江花 昭一 ▶P24へ 野間 和子 ▶P25へ 白井 幸子 ▶P26へ	9:45～11:00 12F 特別会議場 基調講演2※ “桑の木の周りを回りましょう” —新生の神話— 幻影、絶望、そして希望 イラーナ レイ ▶P19へ
11:00			11:15～12:15 10F 1001-1002 評議員会
12:00	10:00～13:00 10F 1004-1005 ポスター掲示		
13:00		13:00～14:00 10F 1001-1002 国際大会大会長講演※ 関係性交流分析と甘え理論 杉田 峰康 ▶P20へ	12:30～13:30 10F 1001-1002 総 会
14:00	13:30～15:30 10F 1004-1005 ポスター発表 A グループ B グループ 13:30～14:06 P01～P03 ▶P27へ 13:30～14:06 P10～P12 ▶P34へ 14:06～14:30 P04～P05 ▶P30へ 14:06～14:42 P13～P15 ▶P38へ 14:30～15:06 P07～P09 ▶P32へ 14:42～15:18 P16～P18 ▶P41へ	14:00～15:30 10F 1001-1002 特別講演1※ 早期対人関係の取り込みを 脳科学の視点から考える 定籐 規弘 ▶P21へ	
15:00			14:30～16:00 12F 特別会議場 特別講演2※ 私たちの表と裏 精神分析の視点 北山 修 ▶P22へ
16:00		15:40～17:20 10F 1010・控室 各種委員会	16:15～16:45 12F 特別会議場 閉 会 式※
17:00			
18:00		17:30～20:00 10F 1010 理 事 会	
19:00			
20:00			19:00～21:00 リーガロイヤルホテル 3F 光琳の間 GALA Party
21:00			

大会プログラム

8月15日(木)

※印は国際大会との共同企画

9:15～10:00 開 会 式※

会場：12階 特別会議場

10:00～11:45 基調講演1※

会場：12階 特別会議場

新たなる出発、新たな物語 —世界の語り直しと未来の再構築—

Trudi Newton((英) ITAA 公認教授)

13:30～15:30 ポスター発表

会場：10階 1004-1005

A グループ

座長：松野 俊夫(日本大学板橋病院心療内科)
吉内 一浩(東京大学大学院医学系研究科)
中村英美子(ブール学院大学)

13:30～14:06 A-1 〈エゴグラムとその関連〉

P01 Web 調査による質問紙法『新・エゴグラム』の開発 —第1報— —質問項目の選定と標準化—

○和田 迪子
聖心女子大学

P02 「TEG」で「どちらでもない」が11を超えた人たちの検討

○鈴木 雅子¹⁾、近喰 ふじ子¹⁾、徳永 千和²⁾、大野 美佐子³⁾
1) 東京家政大学大学院、2) 東京学芸大学大学院、
3) 医療法人社団ヘルメス会 J 品川クリニック

P03 新版 TEG II の併存的妥当性の検討

○柴山 修、瀧本 禎之、吉内 一浩
東京大学医学部附属病院 心療内科

14:06～14:30 A-2 〈Okness をめぐって〉

P04 大学生の TAOK の年次的変化

○加城 貴美子
新潟県立看護大学 看護学部

P05 対人場面における行動制御規範と感情との関連 ―ラケット感情の視点から―

○小澤 真
聖徳大学

14:30～15:06 **A-2 〈人格適応論とその活用〉**

P07 ジョインズ人格適応型心理検査(JPAQ)による疼痛を訴える患者の特性について

○青木 絢子¹⁾、宮村 りさ子¹⁾³⁾、花岡 啓子²⁾、川原 律子¹⁾、石風呂 素子¹⁾、
中村 晶子¹⁾、松野 俊夫¹⁾、村上 正人¹⁾
1) 日本大学板橋病院 心療内科、2) 吉祥寺通り花岡クリニック・PSR ストレス医学研究所、
3) 桜美林大学 健康福祉学群

P08 一般病棟でターミナルケアを実践する看護師の看護プロセスと感情、思考、行動について
―交流分析による人格適応論を用いたパーソナリティ理解の視点より―

○藤波 裕子¹⁾、白井 幸子²⁾
1) 久喜すずのき病院、2) ルーテル学院大学大学院

P09 20代30代の就業者が抱える職場ストレスと対処行動がもたらす抑うつへの影響
―8名のインタビューを交流分析理論によるエゴグラム・人格適応論を通して―

○児玉 圭子¹⁾²⁾、白井 幸子³⁾
1) 社会福祉法人巣立ち会、2) 株式会社ジャパンイーエーピースシステムズ、
3) ルーテル学院大学大学院

B グループ

座長：岡田 宏基(香川大学医学部)
佐藤 豪(同志社大学心理学部)
細谷 紀江(学習院大学学生相談室)

13:30～14:06 **B-1 〈交流分析による治療的介入〉**

P10 術後慢性症状を訴える肺癌患者のエゴグラムの特性と短期的交流分析的カウンセリング後の変化

○齋藤 紀先¹⁾、山本 絢子¹⁾、芦原 睦²⁾、萱場 広之¹⁾
1) 弘前大学大学院医学研究科 臨床検査医学講座、2) 中部労災病院 心療内科

P11 交流分析・認知行動療法に基づくホームワーク介入の効果

○齋藤 瞳¹⁾、佐藤 豪²⁾
1) 東京福祉大学 心理学部、2) 同志社大学 心理学部

P12 ゲームをやめるという行動強化によって感情に変容がもたらされた事例

○押川 聖子、江花 昭一
神奈川大学

14:06～14:42 B-2〈交流分析の活用〉

P13 コミュニティ心理学的援助としての TA(交流分析)

○末松 渉
NPO 法人 CESC セスク

P14 自作四コマ漫画法で気づく基本的懸念

○菅沼 憲治
聖徳大学 心理・福祉学部

P15 30分で体験できる“すごろく TA ゲーム”の開発について

○坂本 章、一柳 起譽
コミュニケーターズ・ゼミ

14:42～15:18 B-3〈交流分析と教育・社会〉

P16 中学生におけるロールレタリングの効果に関する研究

○岡本 泰弘¹⁾、森田 喜一郎²⁾
1)久留米大学 高次脳疾患研究所、2)久留米大学医学部 精神神経科学教室

P17 「カッとならないために」の授業をして

○斎藤 恵子
西松園内科医院

P18 「いかり」その光と影 ―心理療法と仏教思想にみられる「いかり」―

○辻 裕美子
カウンセリングルーム渚

8月16日(金)

9:45～12:00 大会シンポジウム

会場：10階 1004-1005

座長：村上 正人(日本大学板橋病院心療内科)

端詰 勝敬(東邦大学医学部心身医学講座)

オーガナイザー：島田 涼子(人間総合科学大学)

「傷ついた治療者」

S01 患者と治療者による解決の共同構成 ～「傷ついた治療者」の視点から～

江花 昭一 神奈川大学保健管理センター

S02 私の経験

野間 和子 野間メンタルヘルスクリニック

S03 セラピストの直面する問題

白井 幸子 ルーテル学院大学大学院

13:00～14:00 国際大会大会長講演※

会場：10階 1001-1002

司会：繁田 千恵(TA心理研究所)

関係性交流分析と甘え理論

杉田 峰康(福岡県立大学名誉教授)

14:00～15:30 特別講演1※

会場：10階 1001-1002

座長：坪井 康次(東邦大学医学部心身医学講座)

早期対人関係の取り込みを脳科学の視点から考える

定篠 規弘(自然科学研究機構 生理学研究所 大脳皮質機能研究系 心理生理学部門)

8月17日(土)

9:45～11:00 **基調講演2***

会場：12階 特別会議場

“桑の木の周りを回しましょう” —新生の神話— 幻影、絶望、そして希望

Elana Leigh ((豪) ITAA 公認教授)

11:15～12:15 **評議員会**

会場：10階 1001-1002

12:30～13:30 **総 会**

会場：10階 1001-1002

14:30～16:00 **特別講演2***

会場：12階 特別会議場

座長：久保 千春 (九州大学)
島田 凉子 (人間総合科学大学)

私たちの表と裏 —精神分析の視点—

北山 修 (九州大学名誉教授)

16:15～16:30 **閉会式***

会場：12階 特別会議場

19:00～21:00 **GALA Party**

会場：リーガロイヤルホテル 光琳の間

抄 録

基 調 講 演

国際大会大会長講演

特 別 講 演

大会シンポジウム

ポスター発表

新たな出発、新たな物語 —世界の語り直しと未来の再構築—

New beginnings - New stories :
Re-storying our world, Rebuilding our future

トゥルディ ニュートン
(英) ITAA 公認教授(教育分野)

Trudi Newton
Teaching and Supervising Transactional Analyst of ITAA (Education),
UK

私たちは、自分たちの人生の方向を見つけるために自分自身や家族や社会のできごと語るストーリー・テラー(お話し役)です。自分自身や他者に関わるすべてのストーリーは、私たちに何かを教え、そしてそこから学ぶことは、人として私たちに本質的に備わっている一部なのです。

私たちはどう変化するのか…私たち自身のストーリーを変える、そして周囲の人たちの変化の可能性を広げることが変化ではないでしょうか。

バーンは、スクリプトの形態には4つの要素があると言っています。それらは、私たちの環境や運命、そして向上心、回復力、そして克服する力をふくむ自然の原理からの肯定的と否定的な両方のメッセージであると言っています。

運命がドラマチックにあるいは、微妙に介入するとき、私たちは前向きで健康的なビリーフを高めるために自然の原理を活用し、また自然の原理を高めるためにプラスの影響力を利用する、そして回復力を増幅していきます。

私たちが本来の学びを促進したり、回復を支援したり、私たちのストーリーを選び、変更したり、イキイキとした意味あるストーリーを創りだすために、私たち自身や、仲間や、クライアントや家族、専門家や国を支援するのに、これから TA をどう使って活気を創り出すのでしょうか？

We are all storytellers, creating our own personal, family and social narratives to find our way in life. Every story, our own and others', teaches us something, and learning is an intrinsic part of being human. It is also how we change - change our own stories and open up the possibility of change for others.

Berne suggests that there are four elements to script formation: positive and negative messages from our environment, fate, and *physis* (which includes aspiration, resilience and overcoming). When fate intervenes, dramatically or more subtly, we can use that physis to enhance positive, healthy beliefs and harness positive influences to enhance physis and increase resilience. How do we use transactional analysis to promote real learning and aid recovery, to choose or change our stories, helping ourselves, our colleagues, clients, families, professions and nations to create vital and significant stories for building the future?

関係性交流分析と甘え理論

Relational TA and the Amae Theory

杉田 峰康

福岡県立大学名誉教授・日本交流分析学会理事長

Mineyasu Sugita

Professor Emeritus at Fukuoka Prefectural University,
Chief Director of Japanese Society of Transactional Analysis

甘え理論を提唱する土居は、依存欲求を性的あるいは攻撃的衝動とは別個の一つの動因とみなし、そこから自我の“愛されたい欲求”が発展すると考えるべきであるとした。甘えの原型は乳児がおぼろげに自分とは別の存在であると知覚する母親と密着することを求めることにある。また甘えと自分という意識の間に密接な関係が存在し、自分の意識は内心の甘えを前提にしており、しかも甘えに対立するものとして現われてくるものとされる。

この考え方は自己対象欲求、アタッチメント、前言語的交流、性愛的転移、右脳－右脳連合などの概念を重視する最近のハーガデンとシルズの“関係性の視点”と共通するところがあるように思われる。これら二つの理論の出会いによって関係性 TA がより身近なものになることが期待される。

Doi developed what he calls “*Amae* theory” in which dependency need should be thought of as an independent drive, distinct from the sexual or aggressive drives, from which develops the need to be loved. The prototype of *amae* is the infant's desire to be close to his mother, who, it has come vaguely to realize, is a separate existence from itself. A connection between *amae* and the awareness of the self as expressed in the Japanese word *jibun*, is also examined. This reasoning seems to agree with recent studies of the Relational Perspective by Hargaden and Sills who take account of the sense of self, attachment, preverbal transaction, erotic transference, the right brain-right brain connection, etc. Difficulty in understanding Relational TA ideas may be eased by the encounter of these two theories.

早期人間関係の取り込みを脳科学の視点から考える

Development of Social Cognition: Functional Neuroimaging Approach

定篠 規弘

自然科学研究機構 生理学研究所 大脳皮質機能研究系 心理生理学研究部門 教授

Norihiro Sadato MD., Ph.D.

Professor at National Institute for Physiological Sciences
in the Department of Cerebral Research

早期対人関係の発達、他人の性質や意図を認知するための情報処理過程(社会能力)の発達と捉えられる。機能的磁気共鳴画像(fMRI)の進歩によりヒト脳の神経活動を観測することが可能となり、社会能力を含む高次脳機能の解明が進みつつある。本講演では、fMRIの歴史を踏まえた上で、社会能力発達の重要な指標である共同注意の神経基盤を2個体同時fMRI計測によって明らかにする取り組みについて紹介し、個体を対象としたイメージング研究から、複数個体間の相互作用を直接観測する研究への展開を示す。さらに、自他同一性から自他区別、共感と心の理論の発達を経て向社会行動へ至る社会能力の発達過程を解明する試みについて述べる。最後に、ヒトの社会能力を物質レベルから行動レベルまで統合的に理解するためには神経科学を人文諸科学と結びつけていくことが必須であり、その結節点としてのイメージング研究の重要性を論ずる。

キーワード：脳血流、functional MRI、社会能力、発達、向社会行動

Social cognition is defined as the capacity to engage in information processing with the aim of accurate cognition of other persons' character or intentions. Functional neuroimaging technique has enabled us to observe neural activities in the human brain noninvasively. First the history of functional magnetic resonance imaging (fMRI) and its future perspective are introduced. As an example, presented is our attempt to apply simultaneous fMRI measurements of two individuals to elucidate the neural basis of joint attention, one of the most important behavioral milestones of development of social cognition. Second, neural substrates of the pro-social behavior are discussed. Lastly, I stress the importance of combining current and ongoing progress in neuroscience, from the 'micro' through 'macro' levels, with scholarship within the humanities. As a connecting node for the different research fields, functional neuroimaging technique will play a critical for the ultimate goal of comprehensive understanding of human social cognition.

Key words: cerebral blood flow, functional MRI, social cognition, development, prosocial behavior

傷ついた治療者

Wounded Healer

オーガナイザー

島田 涼子

人間総合科学大学 教授

organizer

Ryoko Shimada, PhD, PTSTA of ITAA (Psychotherapy)

Professor at University of Human Arts and Sciences

E. バーンを含め、およそ心理学に大きな貢献を果たした治療者達は、その人生に根差した深く濃い影を持っていました。自己の光と影の両面を抱えることが、治療者としてのコンテイン力を養うのではないのでしょうか。幼少期に破壊的な衝撃を受け、それを適切に調律してもらえなかったクライアントは、その体験を無意識化しており、それを投影同一視＝ゲームによって治療者に伝えます。治療者自らがその衝撃に耐え、それを理解し受けとめることができ初めて、クライアントは自分の体験を受けとめることができるようになります。それゆえ関係性 TA では、その過程で治療者は自己を用いる必要があると考えます。身をもって苦悩を知るセラピストでなければ、クライアントをそのまま OK だと受け入れることはできないでしょう。このシンポジウムでは、骨太でパワフルな治療者達の体験をお話いただき、TA の包容力について一緒に考える機会としたいと思います。

Most psychotherapists, including E. Berne, who have made great contributions to psychology had dark shadows deep-rooted in their personal lives. It seems that containing both the sides of light and shadow of their own minds brings competence as therapists to contain clients' minds. Clients who had not been held and attuned appropriately when they had experienced a destructive impact would repress the experiences, and they would make the therapists experience the same impact through projective identification i.e. games. If the therapists survive, understand and accept these impacts, the clients would be able to understand and accept their own experiences. Therefore, relational TA insists that therapists need to make use of themselves. Only therapists who have realized pains personally can accept the suffering clients as they are. In this symposium, we will listen to the solidly-framed practices of three powerful TA therapists and learn about the tolerance of TA.

S01

患者と治療者による解決の共同構成
～「傷ついた治療者」の視点から～Collaborative construction of solution by the patient and therapist
～ from the viewpoint of “wounded healer” ～

○江花 昭一

神奈川大学健康管理室

○Shoichi Ebana

Kanagawa University Health Service Center

交流は一般に、対する相手との直接的なやり取りだけでなく、自己の内部における対話からも構成されている。またそれは、過去の「重要な対象」との交流と過去の自己内対話の影響も受けている。

患者と治療者との関係も、そのような事態は同様である。心が傷ついた患者は、過去の「重要な対象」との交流で受けた心の傷も再体験しているのである。したがって治療において、現在だけでなく過去の傷をも繰り返し修復することが必要とされる。

さらに、患者と交流する治療者自身も、過去の「重要な対象」との交流および過去の自己内対話の影響を受けている。患者との共感的な交流において、治療者も過去の心の傷を再体験する。

その傷を修復するように治療者は意識的、無意識的に行動するが、それは患者との交流を解決促進的なものにするだろう。このような意味で、治療は「患者と治療者による解決の共同構成である」といえよう。

Generally, the transactions are constituted of not only the direct exchanges with the partner but also internal dialogs in self. In addition, it is subject to the influence of the exchanges with the past "important object" and past dialogs in self.

The relation between a patient and a therapist is the same. The patient has experienced again the wound of the mind received by the past transactions. Therefore, in treatment, it is required to recover not only the present but also the past wound.

Furthermore, the therapist is affected by the transactions with the past "important object" and past dialogs in self. In the sympathetic transactions with the patient, the therapist experiences his past wound again.

A therapist behaves intentionally or unconsciously so that his wound may be restored; it promotes the solution for the patient. In this sense, it may be said that treatment is "collaborative constitution of solution by a patient and therapist".

P01

Web 調査による質問紙法『新・エゴグラム』の開発 —第1報— —質問項目の選定と標準化—

Development of a “New Egogram Questionnaire” by Web Surveys ~ Selection of Questions and Standardization

○和田 迪子

聖心女子大学

○Michiko Wada

University of the Sacred Heart, Tokyo

J.Dusay が考案したエゴグラムは、わが国で独自の発展を遂げた。演者は1984年に石川らと多変量解析で信頼性、妥当性の高い質問紙法「東大式エゴグラム(TEG)」を、1993年には「TEG 第2版」を作成した。その後多彩な質問紙法エゴグラムが作られたが、これらは回答者が一般成人母集団のランダムサンプルではないことが問題だった。

本研究はこの難題を解決する目的で、ランダムサンプルに準ずる一般成人 Web パネル調査を実施し『新・エゴグラム』の開発を試みる。また、昨今イイ子がキレることが目立ち、自己愛的な人が増えている。これらが AC とどう関連するか、Dusay 提唱の AC 分割案 ACC(C: Compliant)、ACD(D: Demonstrative)を採用し、「怒りと不安」の項目を加えて検討を行う。

調査は2回、2013年4月と5月の中旬に数日間実施する。調査項目はCP、NP、A、NC、ACC、ACD、怒りと不安、計133項目、回答は3件法である。対象は「goo リサーチモニター」南関東居住者(東京、神奈川、埼玉、千葉)20代～60代男女、性年代別にランダムサンプリングし合計約6,000名を募集、有効回答合計約1,600名を回収する。調査結果から『新・エゴグラム』の尺度構成と質問項目を選定し標準化する。なお、調査の詳細な方法と結果は学会当日に発表する。

研究協力: 松井 豊(筑波大学)、渡部 麻美(東洋英和女学院大学)、市村 美帆(目白大学)

調査協力: NTT ラーニングシステムズ株式会社、

NTT コム オンライン・マーケティング・ソリューション株式会社

The Egogram, originated by J.Dusay, has developed uniquely in Japan. Various types of check lists emerged since the first one we made in Tokyo University in 1984, but they were not based on random samples taken from general adult population. To meet this problem, we have worked on a new questionnaire based on two surveys using web panel equivalent to random samples. Our samples consist of 1,600 out of 6,000 adult males and females who are registered with goo research monitor in Southern Kantou area. In the new questionnaire, we divided AC into ACC and ACD representing compliant and demonstrative nature respectively in accordance with Dusay's alternatives. This is done to examine how AC is influenced by the increase of narcissistic people in the present Japan.

P18

「いかり」その光と影 —心理療法と仏教思想にみられる「いかり」—

The Light and Shadow of 'Anger': 'Anger' in the psychotherapy and Buddhism

○辻 裕美子

カウンセリングルーム渚

○Yumiko Tsuji

Counseling room NAGISA

心身症を引き起こすものの一つに、抑制された激しい「いかり」がある。この場合の心理療法は非常に難しい。「いかり」の裏には相手への期待があり、それをキャンセルするという再決断療法のワークが役に立つ。

仏教においても、「瞋恚(しんい)」と表される「いかり」は、三毒のうちで最も心身を害するものとされ、貪りの心より生じると考えられた。釈尊は「いかりを捨て、慈悲の心に代えよ」と説いた。その約千年後に起こった、大乘仏教最後の形態である密教においては、「いかり」はほとけの慈悲の表れとして積極的、肯定的にとらえられ、多くの憤怒尊が作られた。

すなわち、「いかり」は、変革の力となる肯定的な面を併せ持つ。

心理療法でも、我欲に基づく利己心を脱して、「いかり」が自他を苛める方向から転換されると、めざましい活躍や能力発揮がみられる。

具体例を挙げて「いかり」の光と影について述べ、そのエネルギーを生かすことの意義を考える。

'Anger' is one of the causes of the psychosomatic disease. It is hard to treat angry clients. The Work of Redecision Therapy that includes the cancellation of the expectation hidden behind of their anger is useful to them.

Also in Buddhism 'Anger' is regarded as the most severe torturer, and is considered it arising from greed. Therefore the buddha,Shakuson, stressed not to get angry but to have pity and compassion.

Esoteric Buddhism that occurred About 1000 years after him, however, regarded 'Anger' as the expression of the great pity and compassion by the Buddha.

In the psychotherapy we often find the cases that the clients who have got out of their egoism and have diverted their 'Anger' positively became to show their innate ability.

This means 'Anger' has great energy to bring innovation in their life and society.

I will give some examples of the light and shadow of 'Anger', and consider the significance to make good use of its energy.

大会一覧表

No	大会	開催日	大会長	準備委員長	開催地
1	第1回	1976年5月23日	池見酉次郎	桂 戴作	東京都
2	第2回	1977年6月04日・05日	池見酉次郎		福岡市
3	第3回	1978年6月10日・11日	池見酉次郎	河野 博臣	神戸市
4	第4回	1979年6月02日・03日	池見酉次郎	国谷 誠朗	東京都
5	第5回	1980年5月17日・18日	石川 中		東京都
6	第6回	1981年5月23日・24日	桂 戴作	山口 道也	東京都
7	第7回	1982年5月22日・23日	筒井 末春	西沢 道元	東京都
8	第8回	1983年5月28日・29日	川上 澄	佐々木大輔	弘前市
9	第9回	1984年6月02日・03日	杉田 峰康	松枝 延安	長崎市
10	第10回	1985年6月08日・09日	杉溪 一言	国谷 誠朗	東京都
11	第11回	1986年5月24日・25日	中川 哲也	竹野孝一郎	福岡市
12	第12回	1987年6月26日・27日	新里 里春		沖縄県
13	第13回	1988年5月07日・08日	河野 友信		東京都
14	第14回	1989年5月20日・21日	末松 弘行		東京都
15	第15回	1990年5月19日・20日	佐々木雄二		つくば市
16	第16回	1991年5月18日・19日	深沢 道子		東京都
17	第17回	1992年5月09日・10日	国谷 誠朗		川崎市
18	第18回	1993年5月22日・23日	佐々木大輔	遠山 宜哉	弘前市
19	第19回	1994年5月21日・22日	山本 晴義	江花 昭一	横浜市
20	第20回	1995年6月10日・11日	菊池 長徳	大森 啓義	東京都
21	第21回	1996年5月10日・11日	石津 宏	仲本 政雄	沖縄県
22	第22回	1997年6月14日・15日	中村 延江	松野 俊夫	東京都
23	第23回	1998年5月16日・17日	吾郷 晋浩	原 信一郎	東京都
24	第24回	1999年5月15日・16日	久村 正也	濱田 康	札幌市
25	第25回	2000年5月13日・14日	水野 正憲	松岡 洋一	岡山市
26	第26回	2001年5月26日・27日	白井 幸子	国谷 誠朗	東京都
27	第27回	2002年5月25日・26日	西川 和夫		津市
28	第28回	2003年6月05日・06日	久保木富房		東京都
29	第29回	2004年5月14日・15日	久保 千春		福岡県
30	第30回	2005年6月16日・17日	坪井 康次		東京都
31	第31回	2006年8月30日	村上 正人		東京都
32	第32回	2007年6月09日・10日	松岡 洋一		岡山市
33	第33回	2008年5月17日・18日	齋藤 恵子		盛岡市
34	第34回	2009年10月03日・04日	江花 昭一		横浜市
35	第35回	2010年6月12日・13日	芦原 睦		名古屋市
36	第36回	2011年9月18日・19日	小池 一喜		東京都
37	第37回	2012年7月15日・16日	石川 俊男		東京都
38	第38回	2013年8月15日～17日	島田 凉子	久保 千春	大阪市

日本交流分析学会 第38回学術大会
組織委員会

大 会 長 島田 凉子

組 織 委 員 長 久保 千春

組 織 副 委 員 長 村上 正人

プログラム委員長 坪井 康次

プログラム副委員長 江花 昭一

大 会 長 補 佐 小川 邦治

事 務 局 長 花岡 啓子

事 務 局 青木 絢子 児玉 恵子
清水 洋子

監 事 小池 一喜 細谷 紀江

日本交流分析学会 第38回学術大会
プログラム・抄録集

大会長：島田 涼子

発行日：2013年7月1日

事務局：PSR ストレス医学研究所
〒181-0013 東京都三鷹市下連雀1-9-24
事務局長：花岡啓子
E-mail：2013ta38@js-ta.jp

出版：(株)セカンド
 学会サポート 株式会社セカンド
<http://www.secand.jp/>

〒862-0950 熊本市中央区水前寺4-39-11 ヤマウチビル1F
TEL：096-382-7793 FAX：096-386-2025

日本交流分析学会第38回学術大会事務局

〒181-0013 東京都三鷹市下連雀1-9-24

PSRストレス医学研究所 内

事務局長：花岡啓子

TEL.0422-41-5568 FAX.0422-41-5564

E-mail: 2013ta38@js-ta.jp